

鹿島町の民話

○片葉よし

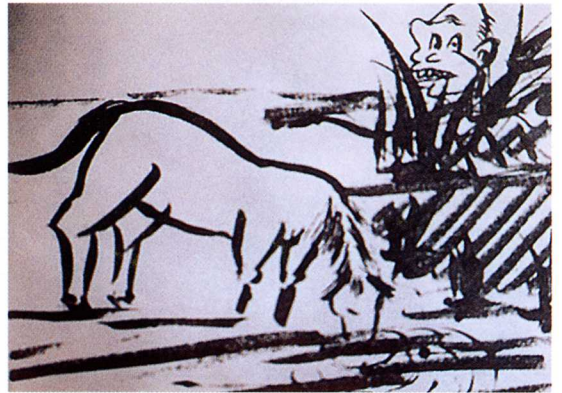
むかし、上板窪の川のそばに、久七というじいさまが住んでいたそうなの。

久七じいさまには、太夫黒という雄馬がおってな、そりやもう元気な手のつけられない馬だったそうなの。太夫黒は毎日のように、にげ回っては、山のおく深くにある沼に行つて、そこに生える「よしの葉」を食べたそうなの。

なんぼうまいのか、いくらつかまえても、すぐになげに行つて、沼の「よしの葉」を食べたそうなの。さすがの久七じいさんも、これにはまいったそうなの。んだ

ども、ふしぎなことに、太夫黒は「よしの葉」の片側しか食べねんだと。ほんで、この「よしの葉」は片側だけになつてしまつたんだと。

やがて、太夫黒は「源義経」の愛馬となつて、大かつやくをしたんだと。
(片葉よしは、以前、上真野中学校の校章となつていました。)



○天野の羽衣と山下玄昌

海老に天野家があつてな、天野家は天女の子孫なんだそうなの。その子孫に「玄昌」という子どもがおつてな、鳥やけものど話をしたり空をとんだりすることができるたいへんな力を持っていたんだと。

「玄昌」は、後に山下に住んで坊さんになつて、みんなから「山下玄昌」とよばれ、いろいろな困つた人を助けてやつたんだと。

あるとき、仙台の松島に住む「雲居法師」と海をはだしでわたることと、空をとぶきょうそうをしたんだと。ほしたら「雲居法師」はダメだつたんだげんちよ「玄昌法師」は山下から海老までとんでいって、海のうえを歩いて松島まで行つてしまつたんだと。まだ「雲居法師」のお寺が火事になつたときには、自分のお寺の池の水をくんでいっしょうけんめいにお経をあげて火を消す手伝いをしたんだと。それはそれはたいした神通力だつたそうなの。

「玄昌法師」の持っていた羽衣は、病気の人の薬としてせんじて飲ませると、うそこいたようにすぐ治つたということじゃ。